

糖尿病治療において画期的な成果ができました。HDC アトラスクリニックは、日本のみならず世界でもトップレベルの糖尿病外来になりました。

当院では、治験や書籍などの出版などを通じて、新薬による日本トップレベルの糖尿病先端医療を目指してまいりました。今回、その結果の一部がまとまりましたので、皆様にご報告申し上げます。

以下に示すのは、昨年、12月に発売された DPP4 阻害剤という新薬（シタグリプチン）を服用された糖尿病患者さんたちの HbA1c の変化です。64名の患者さんたちが半年服薬していただきました。その結果、64名の患者さんの多くは、図1に示しますように、当院の初診時あるいは糖尿病と診断された時点では HbA1c 7%以上の方の割合が55%でした。HbA1c 6.5%以上であり、最初は血糖コントロール不良の方は、実に74%と、非常に多かったのです。血糖不良のまましていると失明、腎不全、心筋梗塞、脳梗塞などを起こします。

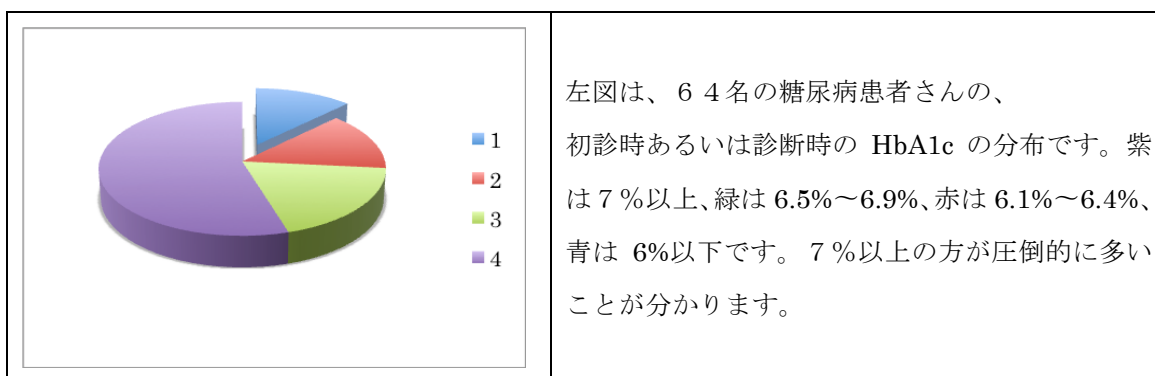


図1：初診時あるいは糖尿病診断時の、HbA1cの段階で分けてみた分布図

しかし糖尿病の従来治療法（SU 剤、 α グルコシダーゼ阻害剤、メトフォルミン、アクトスなど）の治療で、当院に通院中の皆様は、すでに半数（50%）が HbA1c 6.5%以下になり治療は成功しておりました。それでも、HbA1c 6%以下（糖尿病の診断基準 6.1%未満）のレベルの方は、まだ27%でした。

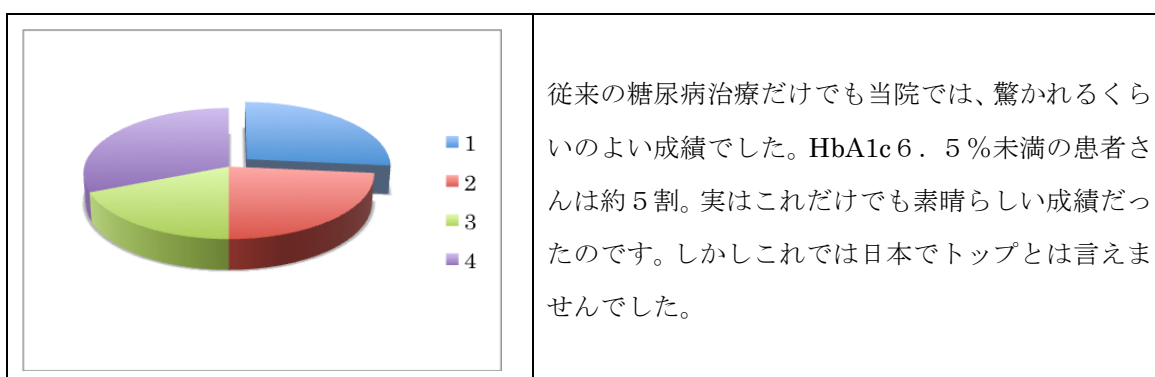


図2：糖尿病新薬を投与直前における、HbA1cの段階で分けてみた分布図

ところが昨年（2009年）12月に発売された糖尿病新薬（DPP4阻害剤）を服薬された患者さんたちには、驚くべき反応が認められました。図3に示しますように、なんと、58%の患者さんたちが、HbA1c 6%以下を占めました。この方達のほとんどは、HbA1cは5%台です。初診時は74%の患者人口比率だった血糖コントロール不良だったのが、たった6%を占めるだけの数値に低下しました。糖尿病網膜症が悪化するのにはHbA1c 6.5%以上からですが、その可能性がある人は4人に3人だったのが4人に1人になりました。おそらく、当院においては、この治療方針で継続していけば、将来は、糖尿病で失明したり透析をうけたりする患者さんは、誰もいなくなるだろう、と言える数値です。

また、既に大学病院の循環器関係の先生がたからも注目をうけており、今後は、共同研究を行い動脈硬化の改善も確認されることが期待されます。心筋梗塞、脳梗塞、狭心症などの疾患は、当院の糖尿病外来では、激減することでしょう。既に心筋梗塞になった患者様でも再発を予防できることが可能になるはずで、また、糖尿病による透析導入例は激減することでしょう。この事実は、日本の高齢者医療費削減政策においても大影響を及ぼす衝撃的な成績です。

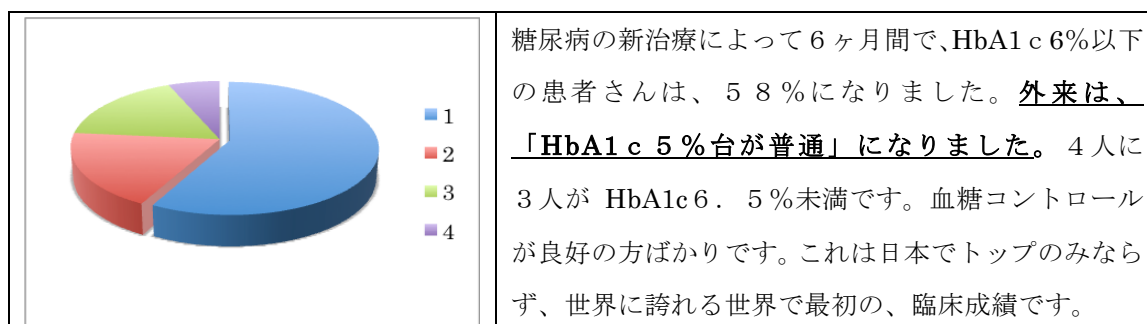


図3：糖尿病新薬を投与6ヶ月後における、HbA1cの段階で分けてみた分布図

従いまして当院の治療成績は、糖尿病の治療の歴史において、日本でトップレベルであるだけでなく、おそらく世界でもトップレベルと称させる成績です。既に、鈴木吉彦院長には全国から講演依頼が届いております。今後は、日本だけでなく世界からも招待講演があるかと思えます。

糖尿病で通院中の皆様には、鈴木院長の講演出張中は、ご迷惑をおかけすることになりますが、代理の糖尿病専門医として慶応大学内分泌代謝科の目黒医師が代診させていただきますので、どうぞ、ご理解のほど、お願いいたします。

2010年8月7日

HDC アトラスクリニック 院長 鈴木吉彦